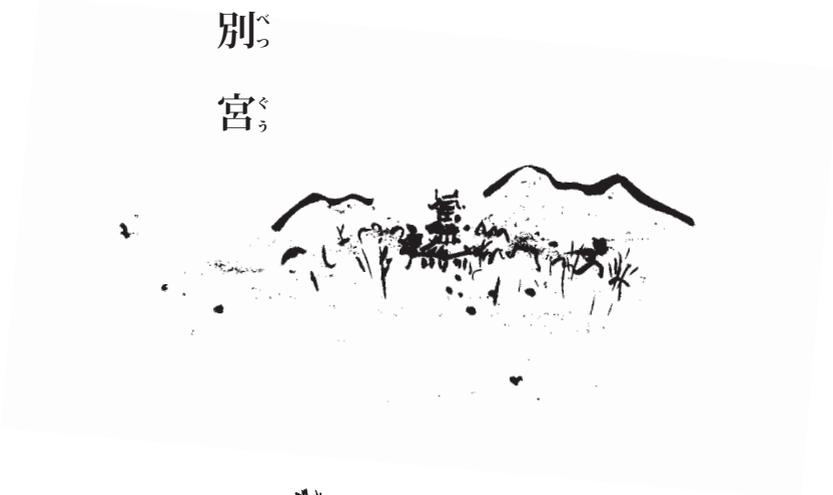


巖

島

別

宮



この年は春から雨が多く、都には厭いやな風が吹いた。

「つちふる…」

と、都人は口にした。

短い春のあらしが大陸から海を越えて吹き寄せ、その風は黄色い土の砂が混じり、人々を不穏な思いにさせた。

父頼信よりのぶは、近頃体力が落ち、不調を訴えることが多くなっていた。清盛の高野山大塔ちやうけい落慶法要にも、景弘かげひろを名代として赴かせ、国許くにごとで養生じやうじやうしていた。

「どうも、京の水が合わぬ…」
と、父はいう。

都に上っても、頼信は祇園社の宿坊で床に臥ふせていることが多く、芙蓉ふようの看護を受けた。どうしたわけか、芙蓉は頼信に懐き、頼信の体調の衰えに眉を曇らせていた。

「僅かながら、処方薬の心得こころえがあれば…」

と、鞍馬仕込みの薬の処方はつかを頼信のために講じていたが、滞在が長引くと、都の邪気が腹臍はらに溜たまるといい、芙蓉の薬草の効はたらきも妙々はかばかしくなかった。

「父も五十五才。先の忠盛ただもりさまのご逝去しよきよにいたく無常を覚えておるようす…」

景弘は、芙蓉にそう告げていた。

頼信が佐伯の里に戻って数ヶ月が経たっていた。サツキが山肌を彩る時期で、極楽寺山にはうぐいすが鳴きききっていた。

保元元年（一一五六年）。

都人が不安な思いに駆られたとおり、その年の夏、高野山の出来事のわずか二ヶ月余り後、天皇家と摂関家を巻き込んだ「お家騒動」である、世にいう「保元の乱」が起こった。

もともと四半世紀も前からつづく、天皇家の皇位継承にかかって反目する崇徳上皇と後白河天皇、摂関家の勢力を争う藤原頼長と藤原忠道、この二大勢力による閥閥の争いであった。

これは相続争いという矮小なものながら、貴族社会が武家政治に交替するきっかけになったという結果は重大だった。

清盛は、この場に居合わせたことで、自らの生涯の盛衰にかかわる大きな舞台への登場に繋がっていた。

この日の戦いに、清盛の手勢の一人として景弘も加わっていた。

藤原忠実・頼長父子が密かに兵を集めているという報せに、後白河天皇は、即座に二人を討てと源義朝に命じ、東三条の関白家へと向かわせた。侍大将として清盛も六波羅の兵を率いて出陣した。騎馬武者の一人に加えられた景弘は、大将清盛の守護に当たり、弓勢としても加わった。

関白家についた源為義の手勢との初めての合戦に、景弘は矢に射られて悶絶する雑兵らを目にし、たちまち屍と化す戦場の惨たらしさや無常を強く心に植えつけていた。

「我が矢に落命した者もあるう…」

それは戦場の定め…とわかつていても、景弘は深い屈託の中にいた。

頼長は、踏み込んできた義朝勢に、慌てふためき逃げ惑うなか流れ矢に首を射られ、父の忠実の屋敷に

庇護を求めたが、父は門を固く閉ざし、それを拒んだ。

「頼長どのは、無念のうちに舌を噛み切つて果てられた…」

保元の乱は、たった半日の戦いで幕を下ろしていた。

保元の乱で後白河天皇方に与した源義朝は、関白家の警護役であつた父の為義と敵対した。

敵味方に分かれて戦つた源氏の棟梁義朝と惣領家を継いだ父為義を思うと、景弘は一地方官の神官に過ぎない身である父頼信に思いを馳せながら、人間の運不運は神も予断を許されぬ苛酷なものだと思つた。

「院も御門も、頼みとするは武人…」

武人に強力な統率力を發揮する者あらば、政も意のままに…景弘は、ふとそう考えながら、体のどこかで総毛立つ思いもあつた。

この都の変を景弘からの手紙で知つた父頼信は、心を痛めた。

この十年の間に、景弘は清盛の配下の侍として、都の盜賊や六波羅に反意を持つ者との諍いなど幾つかの小さな警備上の争いに駆り出されていたが、景弘にとって、鎧兜に身を固め騎馬軍団の一人として合戦に加わつたのは初めてのことであつた。

「怪我もなく、ご安心ください…」

という景弘の書状に、母の萌子も安堵していた。

「浮渡も、祝着至極…」

頼信は、そう口にした。

地御前の神官屋敷には、景弘が二十才の時に娶った妻がいた。都勤めの夫の無事を願い、浮渡は日々神仏に祈りを捧げていた。

浮渡は、極楽寺山西麓にある速谷神社の娘であった。安芸国の一の宮としてこの地の大明神の位にあった古社で、社領も多くその氏子たちの勢力も平良や大野にまで及び、郡司佐伯家とも昔から対等以上の付き合いがあった。

速谷の祭神は、「国造本紀」に阿岐国造として記されている飽速玉男命。

創建は古く、嚴島神社と同じ推古天皇の御代とされていた。三柱の女神が嚴島笠の浜へ天下った時、この平良郷に光臨した従神であったといい、神体は自然の大石で神が宿るといわれた。

「跡取りどのに、速谷の娘を……」

と言い出したのは、田所の伊佐であった。

浮渡は、まだ十三の娘であった。

幼い頃から賢く、静かな娘であった。

「明くれば、嫁ぐによい齢になろう……」

速谷の宮司の筑祢も、この婚儀を悦んだ。筑祢は、頼信父子が力のある郡司である佐伯軍団の長としてこの地を束ねる必要があることをよく承知していた。二つの神社が縁を結び、絆を深めることは、郡司として佐伯神主家の力を揺るぎないものにするため、重要な手立てであった。

景弘と浮渡の婚儀は、その一年後に執り行われ、翌々年、嫡男景信が誕生していた。

「保元の乱の戦の功により、清盛さまは、播磨守に任ぜられた……」

景弘の手紙には、そう認められていた。

「清盛どのは、父忠盛どのを越えんばかりの出世の勢い…」

保元の乱の後、数多の国守の中でも最も豊かな国を任されることが実現した清盛は、一方の侍大将として戦った源義朝の処遇に比べ、大きな差があった。

この義朝の不满が、後の「平治の乱」に結びつくことは、まだ誰も予測できなかったことであった。

清盛は、播磨守任官と共に九州太宰府の実質的な支配者となり、宋との交易についても自らの権限をもって積極的に介入できる立場を得ていた。

清盛は、播磨守の位より、むしろ大宰大貳だざいのだいにの官位に強く執着していた。保元三年（一一五八年）秋口に大宰大貳となつて、清盛は、これまでの宋船との交易が九州太宰府で執行されていることに強い改革の意志を抱えていた。

清盛の壮途そうとは果てしなかった。

「九州に留まらせず宋船を瀬戸内に引き込み、直に都の近くで取引したい。その交易は、きつと大きな富をもたらすに違いない…」

そのためには、都を京ではなく、攝津せつの海の、大輪田おおわだの泊とまり近くの海辺に遷うつしたい。それは、和船と違い喫水の深い宋船を停泊させるためには、住吉みなとの湊みなとでなく、深い海を持つ大輪田の泊とまりにしなくてはならないと、考えていたからであった。

「福原遷都…」

この清盛の夢は、こうして育まれていた。

安芸の嚴島神社造営は、瀬戸内の航路の安全を願う清盛にとつて最も頼みとする「海の鎮護の大明神」であり、清盛の夢の実現に不可欠のもので、それは高野山でのお告げにも叶うものであった。

六波羅の平家屋敷で、景弘が連れて行つた巫女たちが、舞を見せていた。

白拍子姿の巫女たちは、何れも美しく、舞や歌の修行を積み、和歌や囲碁将棋などの心得もあり、屋敷の男たちの遊びの相手をして飽かさなかつた。

景弘が特に念を入れたことは、白拍子の舞の、見る者の心を捉えて離さない所作の美しさと気品であつた。

景弘の脳裡には、劍の師である田所の伊佐の刀術や鞍馬の山で西行が見せた「北辰」の刀形の美しさがあつた。

「ゆつくりとした動きの中に、厳しい緊張感がある…その所作は、妖しいばかり…」

水干姿に鮮やかな緋袴をつけさせ、烏帽子に腰刀を佩かせたのも景弘の工夫だつた。

景弘は都でも高級な絹織物の白生地を贅沢に使つて、水干を誂えさせた。気品と凛々しい男姿。それが娘として都の男どもを惑わせる演出だということを知つていた。

「わが屋敷にも、内侍を…」

清盛は、面白がつて、景弘にそう告げた。

「わが庵で修行しておる芙蓉が手塩にかけし優れた巫女たち。この娘たちを内侍に仕上げることができま

する」

そう告げたのは、堀河の尼であったという。

内裏ないりにおいては、御門の言葉を直接耳にすることは適かなわず、傍そば近く世話する女官を通じて詔を宣した。

内侍とは、その役目の女官を指した。

律令制にあつて内侍司ないしのかみといい、御簾みすの向こうで顔も見せぬ御門の言葉を伝える役目は掌侍ないしのじょうであつた。それゆえ、齋宮寮さいくうりょうの女官は内侍と呼ばれた。

堀河の尼は、芙蓉みぎに巫女修行みこだけでなく宮中の女官の素養を身につけさせるべく作法や和歌、漢籍などの教養を修めさせ、内侍としての心得を身につけさせた。

局つぼねであつた堀河の尼の内侍道場は、都の外にまでも広く知られた。

中山忠親たなかという公家くげの書いた『山塊記さんかいき』に、平家屋敷の一角にある巖島別宮やそこで貴族はぶに侍る内侍の記述がある。

「巖島の内侍…」

いつの頃からか、

そのような呼び名を六波羅の屋敷では耳にするようになっていた。

景弘が六波羅の清盛屋敷内に、巖島別宮の造営を願い出たのは、保元の乱の二年後のことであつた。

「都に、わが巖島神社を…」

父頼信の願いを聞かされていた堀河の尼は、その実現のために内侍が役立とうと、景弘に伝えていた。

「芙蓉が、こうして我が野望のために、援けを惜しまぬわけは、如何なことゆえか」
ふと、景弘は、そう胸の内です懐していた。

「あの初めて芙蓉に遇うた祇園社の境内：あの日は梅が盛りであった」

あの時、若い景弘は、激しく心を動かされた記憶があった。

縁あつて芙蓉の易卦の立ち店に口利きする成り行きになったが、あれは自分にとって一つの心意気であつた：と、景弘は思った。

「わしのことを、芙蓉は好いてくれていよう」

それは、間違ひなかつた。

芙蓉の縁で仁和寺へ訪ねていった堀河の尼との出会い、そして清盛から添え状を貰つて出かけていった鞍馬の山の西行法師。

「そうした縁ある人との絆が、清盛さまとの深いつながりをもたらし、ご奉公を通してわが父の願ひであつた敵島別宮の六波羅屋敷内への建立も果たそうとしている」

これは、芙蓉のお陰……

景弘は、そうした多くの人々の絆が、自分たち父子の願ひをかなえてくれることに繋がつていったと思つた。

「芙蓉の心も、そうした援けの力が動かしただろう……」

そう考えながら、景弘は、自分の胸の裡に燻り続けている芙蓉への思いに、じつと耐えていた。

六波羅の清盛屋敷に完成した「伊都岐島神社別宮」は、安芸国佐西郡の巖島神社に倣い白木づくりの神殿に小規模ながら屋根には千木が伸びた美しい宮殿と、太柱の鳥居が設けられ、奥の殿の背後には、こんもりと茂る櫛の大樹を植え込み、鴨川沿いに森の一角をつくっていた。

景弘は、都の宮大工や石工などに細かい指示を出し、その完成度を高めた。

「この別宮、いつの日か、巖島神社造営のための見本とならん！」

景弘の胸中には、その思いがあつた。

屋敷内に井戸を掘り、手水舎と忌火屋敷を設け、そして景弘は格別に粋を凝らした神楽殿をつくった。神楽は、神に奉納するものであつたが、景弘は、神楽やご神饌を供える場所として見物客のための広庭をつくっていた。

「内侍の舞いをお楽しみいただくため」

と、景弘は、清盛に奏上した。

六波羅の屋敷内には鴨川の水を引き込み、小さな流れがあつた。そこには小橋が架けられていた。

「火除け橋にて候……」

景弘は、口に出さなかつたが、この別宮は、伊勢の皇太神宮を真似たものであることを、清盛にだけは分かってもらっていたかつた。

「畏れながら……」

伊勢平氏にとって、伊勢のお宮は、誰よりも誇りにしていた社であつた。

別宮の完成まで工事現場にしばしば足を運んだ清盛の、その熱の入れようにはわけがあつた。

「巖島には、弘法大師さまが開山以来、今も燃え続けております消えずの霊火というものがござります」
この火を、船にて、この六波羅まで運びます。…と、景弘は告げた。

景弘は、巖島みせん弥山の霊火堂で採火した霊火を竹筒でこしら拵えた三十本余りの灯明筒に移すと、七日をかけてはるはる遙々船で運はせせた。

「航海中、風雨波濤ふううはとうに晒さらされ、消えるものもござりましようかと、幾つかの筒に分けてお運びいたしました」
海を渡った霊火は、清盛屋敷の霊火堂でもその小さな光を巖かに照らしていた。